

第Ⅱ章 調査経過

1 調査概要

今回報告する地域は、宮の四至を確認するために行なった第14次調査から第25次調査までの一連の調査のうち、主として第14～18・23・25次の7次にわたって調査した地域である。その他に西面南門地域の前面で西一坊大路の位置にかけて建設されることになった簡易保険奈良保養センター建設予定地における事前調査（第25—2次）、またその後に行われた宮域周辺部での住宅建設等ともなう小規模な調査（第52—2・58・62）を含んでいる。調査地区・調査期間および調査面積は Tab.1 のとおりである。

宮の西南隅 第14次調査は宮の西南で実施し、水田の畦畔や農道の形状から宮の西南隅にあたと推定される位置である。調査の結果、宮の南辺大垣（SA1200）の基底部を検出し、宮の四至の一部を確認した最初の発掘調査となった。さらに、南辺部において小トレンチを2か所設定し、約10m幅の堀地と宮の外堀の一部を確認した。この地域では建築遺構はさほど密ではないが、少なくとも4期の変遷が認められた。なお、井戸SE1230の枡板には、彩色をもつ楯が16枚転用されており、これが『延喜式』隼人司条記載の威儀用楯と一致するものであることが明らかになったことは注目に値する。また、下層遺構として弥生時代後期の大規模な集落跡を検出した。

調査次数	調査区・地区名	調査期間	調査面積
14次	6 ADH—F・I・J・K・L 宮域西南隅	1963.12.3~1964.3.19	57.0 a
15次	6 ADF—P・R・T 西面南門	1963.12.19~1964.5.2	46.0
16次	6 ABY—D・E・F・G 朱雀門	1964.5.29~10.25	35.0
17次	6 ABX—F・H・I 朱雀門内方	1964.5.29~10.25	57.0
18次	6 ADE—P 6 ADF—J・K 西面大垣	1964.5.2~6.13	26.0
23次	6 ABA—N 6 ABN—B 北面大垣	1964.10.3~11.19	7.0
25次	6 ADD—Q 6 ADE—K・L・M 西面中門	1965.3.27~10.2	39.2
25—2次	6 AGC—D 西一坊大路	1965.7.7~7.24	3.6
34次	6 ACA—C・D・E 北面大垣	1966.5.12~5.26	21.3
52—2次	6 ADC—P・R 西一坊大路	(P) 1969.5.8~5.14 (R) 1969.5.30~6.6	1.3
58次	6 ADH—O・T 西一坊大路	1969.9.22~10.4	2.6
62次	6 ABN—X 北辺中央	1970.1.7~1.21	2.2

Tab.1 各次調査の期間と面積

第15次調査は宮の西面南門（玉手門）推定地で実施した。門の遺構（SB1616）は、基壇部の削平が著しく、礎石や根石が残存せず、掘込み地業による基壇基底部を確認したのみである。その規模は南北長、即ち桁行方向が32.1mである。東西方向については西半部が県道下になるため、状況が明確でないが、幅2.7mの大垣が中心にとりつくであろうから、西面大垣のとりつき状況から14mと推定した。この地域は建物遺構が少ないが、中央部で検出した東西塀 SA1692 は官衙地域の区画をなす施設のようなものである。

第16・17次調査は宮中央南辺部で実施し、南面中央門（朱雀門）SB1800の北半部を検出することができた。門基壇は掘込みで地業がされており、検出面から掘込み底面までは深さ約1.5

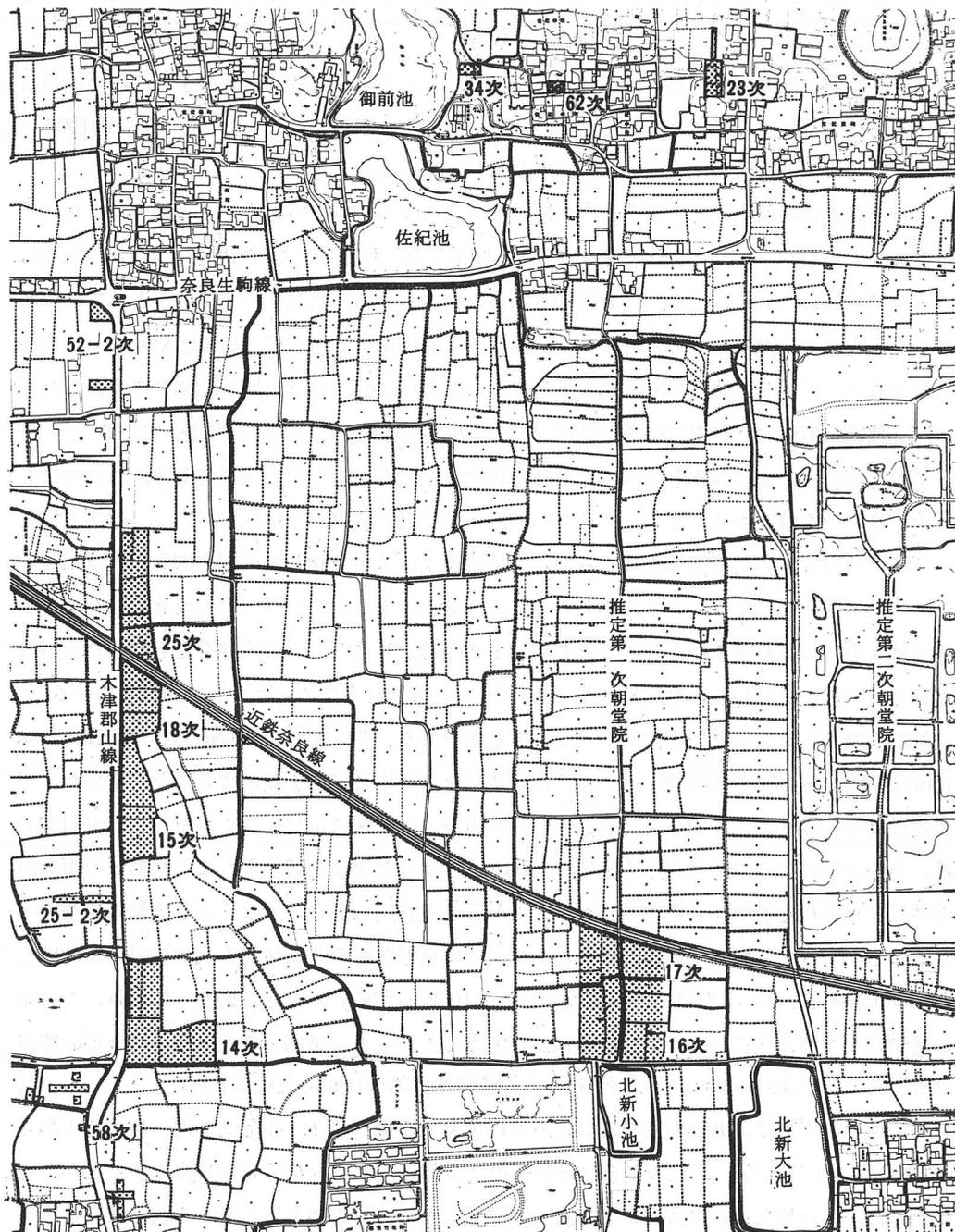


Fig. 1 各次調査地域

m~1.6m、版築が丁寧に行われていた。基壇の検出面では礎石はすでに取り去られていたが、根石の残存状況は良好であった。それによって、朱雀門の規模が5間3戸で桁行・梁行ともに17尺等間であることが明らかになった。門にとりつく大垣基底も良好な残存状態を示し、第14次調査の結果と合せて造営方位を検討する資料を得ることができた。また、朱雀門の中心から東西それぞれ約29mの位置に脇門が設けられていた。門の内方地域(第17次)においては、数条の溝を検出したのみで、何らの建築遺構も検出できなかった。従来、平安宮の応天門に相当する門を発掘区内に想定していたが、今回の調査で検出し得なかったことによって、平城宮の応天門の存否については、将来の課題として残ることになった。

脇門

この調査地でいまひとつ重要な点は、2条の溝SD1860・1900の検出である。西溝が門の基壇によって破壊され、宮造営前のものであることから、これが下ツ道の側溝であると推定した。両溝間の距離は約21mである。朱雀門の東西心は、この下ツ道の心に一致しており、平城京造営の基準線を下ツ道の心に合わせたことが改めて確認されることになった。また、SD1900下層出土土器は宮造営直前の土器編年の重要な資料となった。

下ツ道

第18次調査は西面南門と中央門との中間地域でおこなったものである。この調査はトレンチ掘削にとどめたが、ここでは旧秋篠川の河道を検出した。宮造営時に埋められたものであるが、不完全であったらしく、宮造営後も幅20~25m、深さ約1mの南北にのびる凹みとしてその名残りをとどめていたようである。この他、発掘区中央に東西方向の掘立柱塀(SA1970)、中央部に杭で方形に区画した施設SX1978、そしてこの区画内に掘られた土壙SK1979を検出した。この土壙SK1979からは鞆口・鉾津とともに釘に関する記載をもつ木簡が出土している。

第23次調査は、北辺西寄りの地域における住宅新築工事に伴う事前調査である。ここでは北面大垣面大垣推定地を縦断する形でトレンチをいれ、南側では、遺構面は攪乱が著しく、建築遺構としてまとめ得るものは検出できなかった。大垣の築土は地山を約1.4mの幅で15cm程度掘り下げ、版築の状況を残すが、きちんとした掘込み地業というほどではない。大垣北方は約7mの平坦地があって瓦敷溝にいたり、この間が堀地かと推定された。この築地をともなった大垣は造営当初のものではなく、最初は柱間寸法約2.8mの掘立柱塀であったことが判明している。

北面大垣

佐伯門

第25次調査地は宮の西面中央門(佐伯門)推定地である。門の遺構(SB3600)は、西面南門(SB1616)と同様、基壇の削平が著しく、掘込み地業による基壇基底を検出するにとどまった。その規模はSB1616と比較すると南北方向、即ち桁行方向が29.1mでありやや短い。東西方向は、西面大垣のとおり状況からみるとSB1616と同様な規模と考えられた。発掘区の南北両端地域で掘立柱建物数棟を検出しており、これらの重複関係から、少なくとも3期の変遷を認めることができた。また、門の内側8mの位置では発掘区を南北に横切る掘立柱塀SA3590とSA3680を検出した。両塀は、門の正面の位置で10間分約26m隔たって始まっており、この塀の途切れた空間が門につながる宮内の通路にあたると思った。第25—2次は西一坊大路の確認調査である。外堀(SD3699)の西方約30mの位置で南北溝(SD3698)を検出した。

西一坊大路

この他の調査地は、北大垣及びそれにちかい位置での調査(第36・62次)と、西一坊大路の調査(第52—2・58)である。北辺の調査は後世の攪乱が著しいため、何ら遺構を見出すことができなかった。西一坊大路の調査は、発掘面積が狭少なため、宮の西外堀と考えられる溝を検出するにとどまった。

2 調査日誌

A 第14次発掘調査

6ADH区 F・I・J・K・L 地区

1963年12月3日～1964年3月19日

- 12・3 ベルトコンベアー運搬。
- 12・4 表土排土開始。雨のため午前中で中止。
- 12・5 表土排土。実測基準線設定準備。
- 12・6 表土排土。実測基準線設定。
- 12・7 J・L地区遺構検出開始。床土下の暗褐色砂質土を排土。瓦器を含むが、遺物の出土量は僅少である。
- 12・9～10 暗褐色砂質土排土完了。この面では柱穴が見られないため、さらに掘り下げる。砂と粘土の土層のため、柱穴の検出は困難をきわめる。小穴数個を検出。
- 12・11 南半では再度の排土でも遺構は発見されない。そのため、現状を遺構カードに記録してさらに粘質砂層面まで掘り下げる。溝数条を検出。
- 12・12 SB1414 を検出。この他に柱掘形をいくつか検出したが、建物としてまとまりにくい。また、土質の異なる方形の輪郭がある。弥生式土器が含まれているので、弥生時代住居跡存在の可能性がある。
- 12・13 L地区で弥生式土器が多量に出土。K地区の床土排土開始(12・25迄)。
- 12・14 SB1366・1379・1419等を検出。SB1366にはいくつか柱根が残る。
- 12・16 SB1366 東妻の柱穴と思われるものを検出したが、他と比べて小さく疑問である。J・L

- 地区写真撮影。
- 12・17 写真撮影終了。
- 12・18 J・L地区実測準備。
- 12・19～21 実測。
- 12・23～29 J・L地区弥生時代の遺構検出。
- 1964・1・11 J・L地区埋め戻し開始。K地区遺構検出。西南隅近辺で東西方向の大垣(SA1200)痕跡を見出す。大垣の北側では瓦堆積が密であるI・F地区、地区杭打ち。
- 1・13 遺構面検出。
- 1・16 K地区西端で南北方向に連なる高まりを検出。宮の西面大垣かと考えられるが南へ掘り進むにしたがって不明瞭になる。南面大垣(SA1200)も西に進むにつれて不明になり、宮西南隅は本日の段階では確認できない。
- 1・18 I地区の遺構検出開始。南辺部で瓦が集中して出土。この地区ではSA1200はかなり明確に検出し得るようである。
- 1・21 F・I地区南半部に瓦の散布が多い。とくにSA1200のすぐ北は幅50cm、深さ20cmの溝状になり、瓦がはいりこんでいる。
- 1・22 SB1222・SA1240の掘形を検出。柱根が良好に残る。SA1200犬走りの部分に柱穴状の小穴がある。しかし、整然としてはいない。
- 1・23 SA1240南端部でSA1200築土の高まりが

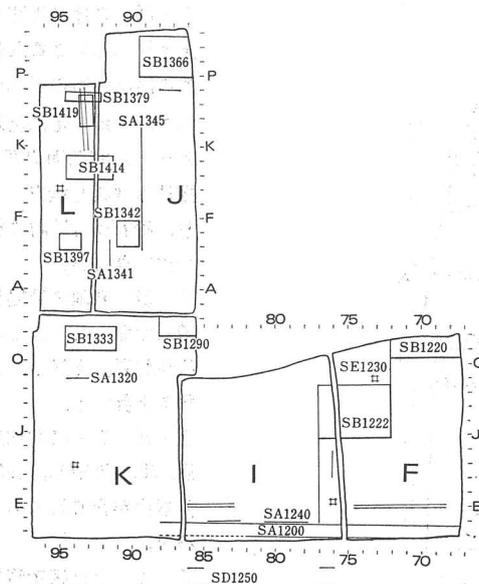


Fig. 2 第14次調査地域の地区割と主な遺構

明瞭になる。

1・24 発掘区南端の北約7mに浅い東西溝を検出。SA1200の雨落溝か。

1・25 I地区の遺構検出終了。

1・26 K地区でSB1333を検出。またSB1290の掘形を一部検出。F地区ではSB1220南側柱穴列を検出。

1・28 降雨のためほとんど作業進展せず。

1・29 K地区西端を掘り下げたが、青灰色砂利まじり粘質土、青色砂の堆積があり、大垣遺構は認められない。SB1333検出。東西棟建物になる可能性あり。F地区SB1220の西妻柱を検出。SB1220の北に接して井戸らしき掘形検出。多量の瓦出土。

2・3 写真撮影準備のため遺構検出面清掃。

2・4 写真撮影。

2・5～6 写真撮影。I・F地区実測準備。

2・10～11 ここ数日の降雨のため排水作業。

2・12 実測準備。

2・13～17 実測。

2・18 下層遺構検出。

2・19 大垣地域の瓦とりあげ。

2・20～26 下層遺構検出。

2・27 SA1200の北雨落溝を西寄り検出。東へ進むにしたがって浅くなり、不明瞭になる。

2・29～3・9 遺構検出継続。

3・10 F地区SE1230掘り下げ。井戸枠の上部が見える。

3・11 SE1230掘り下げ。枠組みの構造がかなり明瞭になる。

3・12 SE1230掘り下げ。

3・13 SE1230井戸枠とりあげ。背面に文様彩色あることを発見。

3・14 SE1230井戸枠写真撮影。

3・16～19 補足調査。3・19にて上層遺構の調査終了。以後は下層の弥生時代の遺構調査を続行する。

3・23 京都大学小林行雄氏から、SE1230井戸枠に転用されていた彩色楯が『延喜式』単入司条記載の威儀用楯と一致するとの教示をうける。

B 第15次発掘調査

6ADF-P・R・T地区

1963年12月19日～1964年5月2日

12・19～25 表土排土。

1964・2・22 南北両端から遺構検出開始、P・T両地区とも床土の下約60cmまで暗褐色砂質土が堆積し、瓦片を含んでいる。その下層は黄褐色

砂質土であり、その上面まで掘り下げる。P地区はとくに砂が多い。西端で築地痕跡を検出。西南隅で石積みの井戸(SE1591)検出。

2・24 暗褐色砂質土排土。T地区では瓦器片の出土が目立つ。西面大垣は明確でない。検出面下約30cmに黄色粘質土層があり、この層には多量の瓦を含んでおり、さらに掘り下げる必要がある。

2・25 積雪のため作業中止。

2・26 P地区西端で大垣(SA1600)検出。床土下約30cmで青灰色砂質土及び粘質土があり、この層は大垣の下へ広がる。旧地表に近い層であろう。T地区暗褐色砂質土の下は、黒褐色粘質土になる。宮西面南門(SB1616)東南隅の部分で掘込み地業を検出。上部はすべて削平されており、礎石据付け時の根石も残存せず、基壇外構も検出できない。

2・27 P地区暗褐色砂質土の下層が酸化鉄の沈着した面になる。この面で遺構を検出。T地区黒褐色粘質土面露出。北へ掘り進むにしたがって次第に上昇する。

2・28 P地区酸化鉄沈着層の下層は黄褐色粘土層が薄く堆積し、砂層となる。黄褐色粘土層まで瓦器片が含まれている。T・R地区SB1616基壇を検出。

3・1 P地区黄青灰色砂層上面を検出。黒褐色粘質土が溝状に下がる。

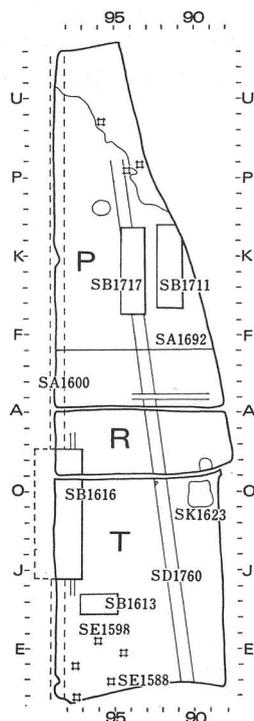


Fig. 3 第15次調査地域の地区割と主な遺構

3・2 P地区 SA1692の柱掘形を6間分検出。R地区 SB1616の北端を確認。門基壇と大垣との造営時の先後関係は明瞭でない。

3・3 P地区 SA1692は更に2間分東へ延びる。SB1717の柱掘形を検出。R地区門東北の溝状の下がりには東西溝となって東へ延びる。

3・4 P地区 SB1717柱掘形を検出。T地区東北隅に1辺約8mの方形の落ちこみあり、堅穴住居跡か。

3・5 P地区 SB1717は7×2間南北棟となる。またSB1717の東に7×2間南北棟 SB1711を検出。T地区門基壇東方の黒褐色粘質土面を検出。

3・6 P地区発掘区東端に沿う旧河川の岸を検出。河川埋土は暗灰色砂質土。瓦器を含む。T地区門の東南隅にかかって SB1613の柱穴を検出。柱穴はきわめて小さい。柱穴の底から瓦器片出土。

3・7 P地区旧河川の西岸が西方に曲がる。

3・9～10 P地区岸検出。埋土上層には瓦片が多く見られる。

3・11 P地区川の埋土排土。南から遺構検出再開。T地区南端に小型の井戸2基検出。

3・12 P地区遺構面検出。T地区新たに井戸2基(SE1594・1596)を検出。SE1596底に曲物の側板を据えている。

3・13 P地区SB1717は2×7間でまとまる。T地区西辺部で門の基壇に接続する幅約40cmの南北溝検出。大垣の東雨落溝であろう。

3・14 P・R地区遺構面検出。T地区で新たに井戸(SE1598)1基検出。底に曲物の側板を据えている。

3・16 R・T地区遺構面検出。排水作業に専念。

3・17 写真撮影準備のため遺構面を清掃。写真撮影。

3・18～19 実測準備。

3・21～29 実測。

3・31 井戸(SE1592・1596)発掘。

4・1 井戸(SE1592・1596)発掘。発掘区中央部の古墳時代南北溝(SD1760)発掘。

4・2 SD1760発掘。T地区小型井戸2基(SE1588・1596)発掘。2基ともに底に曲物を使用。実測後とりあげる。

4・3 SD1760発掘。R地区では遺物が多い。T地区東北隅の土壌SK1623発掘。平安時代の土器が混入している。

4・4 午後排水。

4・6 SD1760写真撮影後実測。SK1623土層観察のため、西南4分の1を残し掘り下げる。下層に自然遺物(植物遺体)堆積。

4・7 SD1760実測。SK1623発掘。P地区から埋戻し開始。

4・11 排水作業。

4・14 SK1623発掘。写真撮影。実測。埋戻し作業続行。

4・15 SK1623西南部発掘。埋戻し続行。

4・16～5・2 埋戻し作業。

C 第16・17次発掘調査

6ABX—F・H・I, 6ABY—D・E・F・G地区

1964年5月29日～10月25日

5・29 午前中ベルトコンベアー運搬。午後G地区南端から表土排土開始。買収地のため、耕土と床土を同時に排土。能率が上がる。

5・30 E地区表土排土開始。

5・31～6・16 表土排土。耕土下の床土は約15cm～25cmの厚さであり、その下層は南半部では含礫褐色土、北半部では黄色砂質土となり、上面に瓦片が散見できる。この面で遺構検出を行う。

6・17 南から遺構検出開始。南端部で含礫褐色土が東西方向に広がっており、宮大垣(SA1200)の基礎と考えられる。この含礫褐色土は北に向けて次第に下がり、大垣の北縁部を検出。北縁部以北は瓦片を含んだ暗灰褐色砂質土が堆積している。東部では暗灰褐色土面から掘込んでいる南北溝(SD1825)を検出。

6・18 SD1825はなお北へ続く。溝底の3カ所に長さ約60cmの角材が据えられている。門(SB1800)の礎石据えつけの掘込み及び抜き穴(以下礎石跡とする)をE地区で1カ所、G地区で2カ

所検出。いずれも不整形で径約2mある。根石を1部残り凝灰岩礎石の断片も含む。G地区のSB1800基壇内で柱根の残る柱掘形列(SA1812)を検出。G・E地区で東西溝(SA1200雨落溝)検出。

6・19 E地区で礎石跡を新たに2ヶ所検出。SA1812の掘形検出。SB1800掘込み地業北縁でSD1763の延長部を検出。SB1800の北雨落溝か。G地区西半部は灰褐色瓦層の下が地山となり、この面で遺構検出を行う。

6・22 排水作業。G地区東南隅ですでに検出した礎石跡に対応する中央柱通り礎石跡検出。門の桁行は5間であろう。

6・23 SB1800中央柱通りの礎石掘形は、北側柱列より浅い。G地区でSB1800の掘込み地業西端と見られる土層の変わり目を検出。

6・24 E地区SB1800中央柱通り礎石跡3カ所検出。E・G地区境界の農道側溝を除去し、礎石跡を南北に2カ所検出。

6・25 降雨のため作業休み。

6・26 SD1763は発掘区東端まで延びる。E地区でSB1800にとりつく大垣(SA1200)の掘込み地業境界を検出。これはG地区のものに対応する。

6・27 遺構検出作業開始後、まもなく降雨のため作業中止。

6・28 E地区SA1200上に約4.2mの間隔で柱掘形検出。いずれも柱根あり。脇門(SB1801)であろう。掘形内側に接して凝灰岩が据えられている。G地区SD1825の兩岸に柱根の残る2個の柱穴(SX1830)を検出。

6・30 SB1800以北では地山上面で遺構が検出されるが、中央部の約20m幅の間は地山上に3~5cmの遺物を含まない褐色土の置土がある。この置土直上にはバラス層が認められる。E地区SD1844は古い溝SD1860を埋めた後に設けられたものである。SD1860からの出土遺物はない。SD1860は宮造営以前の溝か。G地区東西溝SD1893を検出。発掘区西端から約17mで南折する。

7・1 SD1893から南折するSD1890は大きく上下2層に分かれる。上層は瓦を多く含むが、下層は無遺物である。この地域で地山直上に弥生式土器の包含層を検出。この包含層上面で遺構検出を続行。

7・2 中央部のバラスをのせた褐色土はさらに北へのびる。SA1765の柱穴掘形1間分検出。掘形は大きく、一見土壇状である。

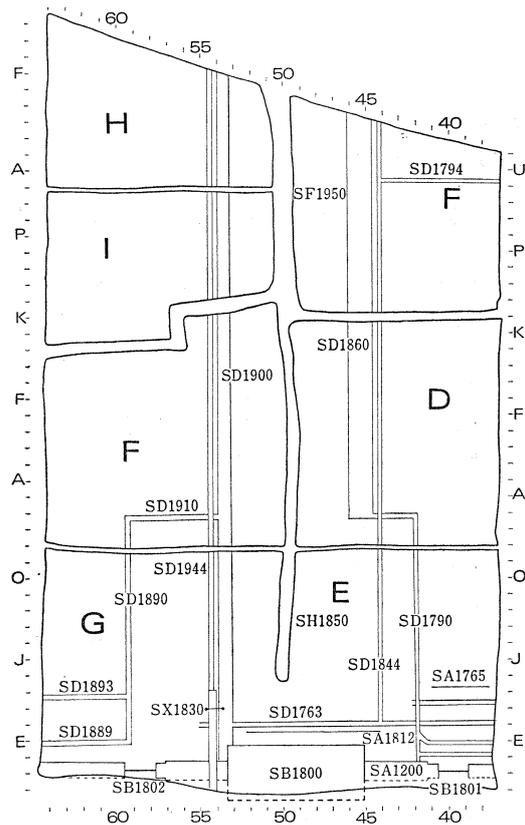


Fig. 4 第16・17次調査地域の地区割と主な遺構

7・3 SA1765の柱掘形をさらに2間分検出。

SD1808上層の瓦出土状況を写真撮影。バラスをのせた褐色土はSB1800の北約15mまで延びる。

7・4 バラス敷きは北へ掘り進むにつれて残存していない部分が多いが、バラス下の褐色土はなお北方へ続く。

7・6 褐色の置き土はなお続くが、バラスはほとんど見られない。SD1890下層溝を追求。

7・7 E地区褐色土は門北方約30mでとぎれるため再び地山直上面で検出作業。G地区バラスは削平されているが、褐色の置き土は続いている。

7・8 E・G地区とも、弥生時代の土壇、溝状遺構を検出したのみ。E・G地区の遺構検出完了。

7・10 雨のため午後から調査。D・F地区の遺構検出開始。新たな遺構なし。

7・11 全体的に地山が砂質を含み、北へ進むにしたがって次第に高まる。SD1790はD地区南半部で西へ屈曲する。

7・13 弥生時代の小溝・小穴が僅かに検出できるのみで、奈良時代の遺構の検出なし。

7・14 特記すべき遺構なし。黄褐色砂質土層上面の検出続行。瓦片の出土がやや多くなる。

7・15 黄褐色砂質土面の検出続行。

7・16 黄褐色砂質土面の検出続行。6ABY地区は終了。6ABX地区に入る。

7・17 I地区にて幅の狭い南北溝を数条検出したのみで、他に顕著な遺構なし。

7・18 F地区北部で東西溝SD1794検出。

7・20 午前中排水作業。黄褐色砂質土面の検出続行。顕著な遺構なし。

7・21 F地区は浸水のため、H地区北端部のみ遺構検出。2条の南北溝SD1900・1944を検出。SD1944埋土中に須臾器や瓦片を含む。

7・22 H地区東部でSK1949検出。陶棺片が出土。SD1900・1944はなお南へ延びる。

7・23 F地区幅約3mの浅い南北溝SD1860を検出。H地区未検出のSD1900・1944南延長部を確認。

7・24 F地区SD1794はSD1844とT字形に接続することを確認。H地区顕著な遺構の検出なし。

7・25 6ABX西半部I地区の遺構検出開始。

7・27 E地区SD1844・1860を検出。SD1844埋土中に瓦片を含む。I地区特に変化なし。

7・28 6ABY西半部で再び遺構検出。6ABX—I地区SD1900・1944検出。

7・29 I地区でSD1900・1944検出。他地区は特に変化なし。

7・30 I地区でSD1900・1944検出。他は特に変化なし。

7・31 SB1800から北方へ幅約20mまで続くバラス面を一部で除去したところ、バラス直下から

II 調査経過

土器片出土。全面除去できるか。

8・1 E地区バラス面除去。黄褐色砂質土面検出。須恵器・瓦片出土。F地区SD1900の掘り下げ。

8・3 G地区SB1800の北半部全面検出にそなえ発掘区中央を南北に走る農道西壁をけずり、堆積土を調査。F地区SD1900検出。

8・4 F地区SD1900検出。他地区では新たな遺構の検出なし。

8・5 SD1900上層はF地区の南辺ちかくで西折。この付近では、軒丸瓦を含む多数の瓦が堆積。

8・6 写真撮影準備。遺構検出面清掃。

8・7 SB1800基壇検出面清掃。SB1800にかかる農道路肩を削る。

8・8～10 写真撮影。

8・11 農道除去。

8・12 農道下でSB1800基壇地域精査。礎石跡及びSA1812柱掘形と柱根検出。SA1812の掘形は、SB1800礎石抜取痕跡を切って掘込んでいる。なお道路下でも階段痕跡は認められない。西脇門(SB1802)検出。東柱穴掘形が遺存。拡張部の写真撮影。実測準備。

8・13～15 実測準備。

8・17 実測開始。

8・18～25 実測。

8・26 実測終了。6ABXの補足調査開始。SD1900北端下層から陶棺蓋、須恵器甕破片等出土。

8・27 SD1900が上下2層に分れることが明確になる。両層ともに遺物を含む。

8・28 SD1900から木簡・加工木片・土器・陶棺片出土。I地区西北から東南に斜行する溝検出。幅約4m、深さ1.5mまで掘り下げたが、なお底に達しない。

8・29 調査開始後、まもなく降雨のため中止。

8・31 SD1900検出。SD1860は6ABY—D地区にも延びてくる。灰褐色砂質土が堆積し、土器片を僅かに含む。I地区斜行溝は湧水著しく、作業難航。

9・1 SD1860はD地区になお続く。I地区斜行溝は約2m掘り下げて土層を観察。地山の砂層が広く拡がり、それを切って浅い溝が掘られていることが判明。

9・2 I地区斜行溝埋戻し。D地区SD1860検出。F地区SD1900検出。

9・3 D地区SD1860検出。D地区の南端部では0.1m程度の浅いものとなる。

9・4 E地区SA1765精査。F地区SD1900検出。

9・5 E地区SD1808下層検出。SA1200の犬走り部まで延びることを確認。F地区東西溝SD1910はSD1900下層とは連ならず、上層溝に接続するものである。SD1900下層はさらに南へ延びる。

9・7 SB1800中央部で基壇築成状況の調査。SA1200基部の築成状況をE地区・G地区各中央部で精査。SB1800は検出面から約1.4m掘り下げても掘込み地業の底に達しない。下部では径20～30cmの玉石がよく突き込まれている。SA1200はE地区・G地区ともに犬走り部からの掘込み地業が見られる。SD1900下層は南にもなお続く。

9・8 SB1800基壇は、遺構検出面から掘り込み地業底まで約1.6mある。底部はほぼ平坦で、礫混り淡黄黒色土を約30cmの厚さで固めている。大垣の掘込み地形の深さは約0.45mである。G地区SB1800北西部で奈良時代面より下の木炭を含んだ層を発掘。土器を含む。SD1900の堆積状況をQラインで写真撮影及び実測。

9・9 SD1900には、下部砂層に打込まれた杭と堰の施設あり。これより南方では溝幅が広くなり、下部砂層の堆積が厚い。G地区奈良時代下層の木炭層を剝離。木炭層出土の土器は、SD1900下層とはほぼ同型式のようである。この層は、大垣犬走り積土下に入る。SX1830の柱根を底まで現わし実測。農道復旧。

9・10 SD1900南端は、SB1800基壇掘込み地業で切られている。SX1830の柱根を写真撮影。

9・11 東西両脇門の柱掘形断面調査。SD1900内の扉SA1812を縮尺10分の1で実測。

9・12 下層遺構の写真撮影。実測。

9・14 下層遺構の写真撮影。柱根取り上げ。東脇門唐居敷き、縮尺5分の1で実測。発掘区南端から埋戻し開始。

9・15 6ABX—H地区南端でSD1900発掘。実測。埋戻し作業続行。午後からブルドーザー2台投入。

9・16 6ABY—F地区北端でSD1900を発掘。実測。調査終了。埋戻し作業続行。

9・17～24 埋戻し作業。

10・25 ベルトコンベアー。諸器材撤収終了。

D 第18次発掘調査

6ADE—P, 6ADF—J・K地区

1964年5月2日～6月13日

5・2 器材運搬・トレンチ設定。

5・4～13 耕土排土。

5・13 地区設定。

5・14～19 床土排土。

5・19 K地区から遺構検出開始。床土直下は暗灰色粘質砂土。川の埋土と思われる。

5・20 K地区南端では床土下約1.7mで地山になる。その間は、暗灰色粘質砂土の堆積である。

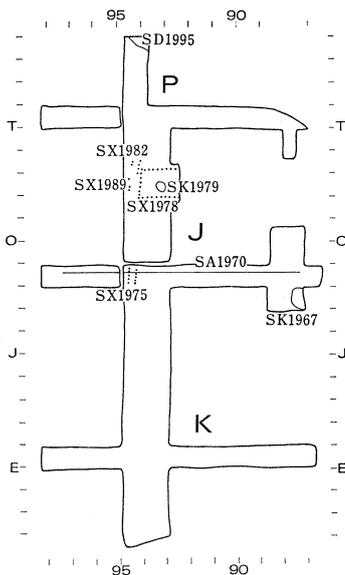


Fig. 5 第18次調査地域の地区割と主な遺構

堆積状況は一律で層序は示さない。地山面が河床と考えられるため、ここまで排土する。

- 5・21 河床検出続行。東西トレンチK地区南部で河岸らしき部分あり。
- 5・22 南北トレンチ河床に幅0.6~0.7mの南北溝検出。
- 5・23 J地区以北は、南北トレンチを西半部3m幅で河床検出を行うことにする。河床のバラス混り粘土が切られている部分があるが、黒色砂が固くしまった状態で見られる。
- 5・24 K地区東西トレンチで河床検出。東半中央部で東岸を認む。西は南北トレンチ西端から次第に上がっていく。
- 5・26 K地区西トレンチ西端で築地状のバラス混り黄褐色土あり。しかし、下層に暗灰色砂質土があり、明確でない。J地区中央部で、杭を6本ずつ「ハ」字形に打ち込んだ遺構 SX1975 検出。
- 5・27 J地区西端で築地状遺構検出。補足調査

で検討することにする。JM92で柱根の残る柱掘形検出。P地区遺構検出開始。河床に瓦堆積。

- 5・28 J地区東トレンチで SA1970 の柱穴列検出。約2mの間隔で7個検出。柱根の残るものあり。川の対岸で同様の間隔で5個検出。最東端の柱穴から北へトレンチを拡張したが、柱穴は検出できなかった。写真撮影。実測準備。
- 5・29 J地区の SA1970 は南北トレンチ内でも検出。東西一連のものとなる。実測。
- 5・30 J地区からP地区にかけて、南北杭列2条を2カ所(SX1982・1989)で検出。J地区中央部で検出した「ハ」字形杭列と同様のものがあるが、これは北で東へ若干ふれている。実測並行。
- 6・1 P地区南北トレンチ西壁沿いが一段高くなる。川の西岸か。J地区からP地区にかけて検出した杭列東側を拡張。小杭数本と横転した材を検出。実測並行。
- 6・2 南北トレンチJ・P地区拡張部で杭列検出。5・30検出のもの一連である。南端の土壌 SK1979 から木簡出土。
- 6・3 木簡出土の SK1979 拡張。拡張部写真撮影。土層図作製。
- 6・4 P地区東西トレンチ以南の南北トレンチは全面的に拡張。当初の6m幅で遺構検出。K地区東西トレンチで土層の状況観察のため幅50cmの小トレンチを設定。川の東岸は発掘区西端から約10mで検出。実測。
- 6・5 SK1979 から木簡2点出土。土塊のほぼ全形が明らかになる。木炭が多量に見られる。実測を続行する。
- 6・6 SK1979 内で椀の堆積した小土塊検出。SK1979 の発掘終わる。写真撮影後実測。埋戻し作業開始。
- 6・7 埋戻し作業。
- 6・8 SX1982 の層序調査。埋戻し作業並行。
- 6・9~13 埋戻し作業。

E 第23次発掘調査

6ABA-N, 6ABN-B地区

1964年10月3日~11月19日

- 10・3 測量基準点設定。発掘器材運搬。表土排土開始。北端部では約40cmの盛土があり、その直下は含礫褐色土となる。大垣築土の可能性あり。南半部は、水田耕作土上に約50cmの盛土あり。
- 10・4~10 盛土排土。
- 10・12 耕土排土。
- 10・14 発掘区に北接する畑地に幅3m、長さ15mの南北トレンチを設定。耕作土排土。
- 10・15 N地区北辺で大垣 SA2300 基底部と内側犬走り、外側堀地の一部を検出。以南は、中世以降の溝、小穴などでかなり攪乱されている。

- 10・16 状況は大きく変化せず。
- 10・17 SA2300 上面に、中世の遺物を含む幅1mの東西溝あり。水の流れた痕跡なし。あるいは中世の築地基礎か。SA2300 南に奈良時代の柱穴数個検出。建物としてまとまるか。
- 10・19 北トレンチ設定。SA2300 北約7mの位置に幅1.2mの瓦敷きを検出。築地と瓦敷きの間は堀地か。
- 10・20 写真撮影の準備。
- 10・21・22 写真撮影。
- 10・23 実測準備。北トレンチを北へ12m延長。

- 10・24 実測。北トレンチ溝状の落ち込み小穴以外顕著な遺構なし。
- 10・26 顕著な遺構なし。
- 10・27 北トレンチ写真撮影。SA2300 精査のため1.5m幅のトレンチ設定。大垣は版築によって構築されている。
- 10・28 SA2300構築にあたって、掘込み地業はなされていないが、幅約1.4mで地山が約15cm下げられ、その上に版築が行われ9層の残存が認められる。北方はなだらかな傾斜をもって整地が行われており、墾地と考えられる。大垣部分写真撮影。
- 10・29 版築下層に大垣構築以前の土壌検出。
- 10・30 大垣下層の土壌は1辺2.2mの柱掘形であることが判明。6m西を発掘したところ、同規模の掘形を検出した。
- 10・31 SA2300下の柱穴列検出のため、東西トレンチ設定。約2.2mの掘形6個が約2.8m間隔で並ぶことが判明。築地以前の塀であろう。午後からブルドーザーによって6ABN区埋め戻し開始。
- 11・1～5 埋戻し。
- 11・6 6ABA区発掘開始。西の一部を除き床土排土終了。
- 11・7 床土排土終了後、西方から遺構検出開始。近世の土壌・溝・井戸などでかなり攪乱を受けている。
- 11・9 遺構検出面攪乱多し。
- 11・11 近世の小土壌著しく、顕著な遺構の検出なし。

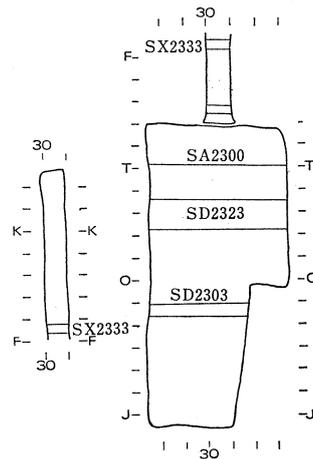


Fig. 6 第23次調査地域の地区割と主な遺構

- 11・12 柱穴と思われるもの数個検出。建物としてまとまるものはない。
- 11・13 小柱穴の数は増えつつあるが、建物遺構としてまとまるものはない。中央部に東西溝検出。埋土内に土師器、須恵器が多量に含まれている。
- 11・14 東西溝の検出続行。遺物は前日と同様、土師器・須恵器を含む。写真撮影準備。
- 11・16 写真撮影。実測開始。
- 11・17 実測。
- 11・18 実測終了。午後からブルドーザーにて埋戻し開始。
- 11・19 埋戻し完了。

F 第25次発掘調査

6ADD-Q, 6ADE-K・L・M地区
1965年3月27日～10月2日

- 3・27～4・9 上土排土。
- 6・24 地区杭打ち。
- 6・24 北端から遺構検出開始。床土下は厚さ約15cmの灰褐色砂質土、そして約60cmの黄褐色粘質土となる。灰褐色砂質土層を除去し、黄褐色粘質土面で遺構検出を行う。柱穴4個検出。
- 6・26 中央部で南北に並ぶ柱掘形をいくつか検出したが、まだ建物としてはまとまらない。
- 6・29 小穴数個検出。灰褐色砂質土から藤原宮式軒平瓦片(6641E)が出土したが、9～10世紀の土器片も含んでいる。全体的に遺物の出土量は少ない。
- 6・30 天候不良のため、灰褐色砂質土の排土にとどめ、遺構検出行わず。
- 7・1 中央部柱掘形列は、南北塀(SA3680)であることが判明。さらに南へ延びるもよう。SA3680の東にSB3690を検出。桁行6間以上、梁行2間でまとまる。1部で掘形の重複があるが、埋土はよく似た土質であり、判別困難である。灰褐

- 色砂質土層の中間に黒褐色土の認められる部分あり。この層から土師器が出土。明日、広げて調査する予定。
- 7・2 灰褐色砂質土層間層の調査を行う。黒褐色土層は酸化鉄が沈澱して形成されたもので、3×2mの楕円形に広がる。この層を除去し、土壌(SK3675)であることを確認。大量の土師器出土。
- 7・3 砂質土面で遺構検出に努める。東西・南北、それぞれの方向の小溝を3条検出したのみである。黄褐色粘質土面検出。Q地区西南隅で宮西面中門(SB3600)基壇東北隅地形を検出。
- 7・5 午前中降雨のため、午後から作業。状況不良のため床土排土のみにとどめ、遺構検出は行わず。
- 7・7 午前中床土排土。午後遺構検出に移る。門SB3600基壇の東掘込み地業境界が不明瞭ながら認められる。基壇検出面に数条、東西方向の溝状遺構あり。きわめて浅い。上層から切込んでいる。水田耕作時の溝か。発掘区東辺、ほぼ門の中

軸線上に幅1.5mの黄色粘質土面検出。性格不明。検討を要す。

7・8 中軸線上の黄色粘質土はさらに広がる。K地区北端で柱穴を数個検出したが、対応するものなし。

7・9 E地区中央部から南へ、削り残した黄褐色土面の検出を行う。SA3680の続きを検出。

7・10 Q地区南端部で小穴多数検出。午後からL地区の表土排土開始。

7・12 Q地区南端部から検出面の土質が黄褐色土斑混入の黒色土に変化する。これは整地土かと考えられる。そしてこの上に門中軸線上に見られた黄色粘質土がのっている。この黄色粘質土は南に広がっていくもよう。

7・13 天候不順のため、L地区の表土排土。

7・14 K地区北部から南は黄色粘質土が砂質土に変わる。この面で柱穴や関連遺構は見られない。

7・15 門基壇南側はかなり削平されており、検出困難である。

7・16 K地区砂質土面削平。浅い東西溝の底は黄色粘質土であり、これはL地区に連続するものである。L地区黄色粘質土面での遺構検出。SB3640検出。この建物の西南隅を古墳時代の溝が斜走している。SA3621の柱穴4個検出。

7・17 K・L地区ともに表土排土。

7・19 SB3640の北廂柱穴列検出。SA3590掘形列は、Q地区で検出したSA3680に連なるもので

あろう。SD3630検出。

7・21 雨のため、1時間程度で作業中止。

7・24 SB3600掘込み地業の東南隅を検出。東に土壇SK3650検出。この土壇内ではSA3590の掘形は検出できない。L地区表土排土終了。

7・26 SA3590はL地区南端まで延びる。L地区南端で井戸SE3605検出。薄い板での井戸枠が認められる。底に玉石が多量に見られる。

7・27 SD3630は北へ進むにつれて次第に浅くなり、SB3600の東南で消滅する。SA3590をL地区南端まで発掘。

7・28 L地区東南隅で井戸SE3595検出。M地区黄色粘質土面は、遺構検出面としてL地区と連続する。

7・29 6ADD-Q地区、6ADE-K・L地区ほぼ終了。M地区の遺構検出続行。SA3590はM地区においても検出。東端で柱掘形数個検出。

7・30 西半部検出面はバラス混り褐色土に変化し、次第に広がりを見せる。最終的には除去し得るものと思われるが、この面での検出を続ける。東北寄り土壇検出。井戸の可能性あり。

7・31 西半部、バラス混り褐色土面検出。

8・2 バラス混り褐色土面検出。

8・3 バラス混り褐色土面検出。東部で柱穴を数個検出。

8・4 西南隅で、黄褐色土面検出。この面は東に向って下がる。東部でSA3555・3563、SB3560の柱穴検出。

8・5 黄褐色土面にバラスが混じる。旧河道の底と考えられる。

8・6～7 旧河道底追求。

8・9 旧河道の岸追求。河底は黄褐色バラス面であり、西岸はこのバラス土が岸になっている。東側では青色粘質土にかわる。

8・10 旧河道東岸は北西に延びる。西辺部で西面大垣SA1600犬走りと思われる面あり。

8・11 旧河道東岸は蛇行して西折する。犬走り部からの瓦の出土多し。

8・12 旧河道を調査。

8・13 写真撮影準備のため、遺構検出面清掃。

8・16 SB3690の北第2柱掘形位置で、入念に掘形を探索したが検出できず。写真撮影準備のため、遺構検出面清掃。

8・17 写真撮影。

8・18 写真撮影。実測準備。

8・19 実測準備。

8・20～21 実測。

8・23～28 奈良時代以前の溝SD3620発掘。両岸はかなりきりたっている。

8・30 M地区中央部西半に東西トレンチ設定。旧河道の調査。東側では東南部でSB3560の柱掘

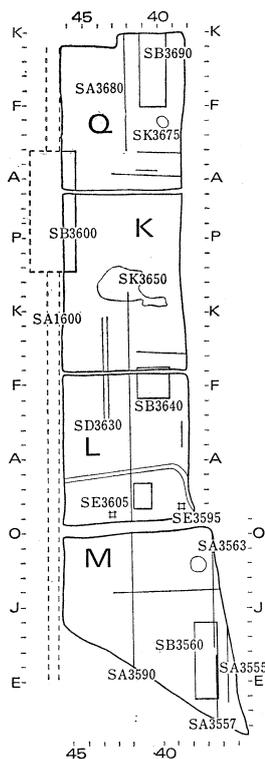


Fig. 7 第25次調査地域の地区割と主な遺構

形を検出。

8・31 西半部にトレンチを入れ、土層調査。大垣築成土と考えられる土層を数層確認。その下層は黒色土である。この黒色土が旧河道の岸になる。

9・1 西側トレンチ土層図作製。東南部のSB3560が7×2間南北棟にまとまる。SB3600基壇

築成状況調査のため、トレンチ設定。

9・2 SB3600基壇調査。

9・4 M地区のトレンチ調査。

9・6～8 M地区の土層図作成。

9・11～13 M・Q両地区の土層図作製。

9・15～10・2 埋戻し作業。

G 第25—2次発掘調査

6AGC—D地区

1965年7月7日～7月24日

7・7 南北6m、東西60mのトレンチを設定。すでに盛られている約1mの整地土をバックフォアを使用して排土。

7・8 整地土排土。

7・9 整地土排土。東方から遺構検出開始。灰褐色粘土質土面を遺構面と予想して発掘。本日は顕著な遺構なし。

7・10 整地土の排土終了。若干の遺物が散在するが数条の南北方向の小溝以外には遺構なし。灰褐色粘土質土面は、東方ではやや砂質を含むようになる。

7・12 トレンチ中央部で小柱穴を検出したが、建物としてまとまるものではない。

7・13 トレンチ西部南壁寄りで柱穴を2個検出した。その北側に凝灰岩を含んだ直径30cm前後の石が散在し、この付近は東西方向に暗褐色土の広がりがある。

7・14 暗灰褐色土の広がりの中世の溝状遺構となる。トレンチ東端から1mの位置に、南北溝

SD3699の西肩を検出。

7・15 SD3699を掘り下げる。上層は暗褐色粘質土、下層は、黒色粘質土が堆積している。壁面は強い傾斜をもっているが底面はトレンチ外になる。位置、規模から宮の西外堀と考えられる。トレンチ中央部で浅い南北方向の溝状遺構を検出。西一坊大路西側溝の可能性もある。

7・16 写真撮影。

7・17 降雨のため実測できず。午後から中止。

7・19 実測。補足調査に移る。東半部でトレンチ南壁に沿って幅1.5mで掘り下げる。遺構検出面（灰褐色粘質土）の下層は、青灰色砂土が約0.25m堆積し、その下層は有機質を含んだ暗青灰色砂土となるが、湧水が激しい。

7・20 トレンチ西半部の補足調査。不明確であった西側の溝（SD3698）を検出。上層からは瓦器片が出土。下層からは藤原宮式を含む瓦類や施釉陶片が出土。

7・24 土層図作製。調査終了。

H 第34次発掘調査

6ACA—C・D・E地区

1966年5月12日～5月26日

5・12 調査開始。表土排土。

5・13 床土が約15cmあり、この下が地山となるため直ちに遺構検出。D地区中央部で東西溝（SD4315）検出。宮の外堀か。

5・14 SD4315調査。検出面はかなり削平されており、中世以降の溝であることが判明。

5・16 D地区の遺構検出終了。E地区を開始。D・E地区中間の通路面がすでに地山面にちかいことを確認。E地区の遺構検出面はそれより約1m下である。検出遺構なし。

5・17 E地区では近年の瓦用土取り跡の他、検出遺構なし。C地区の調査開始。

5・18 C地区、3m間隔で柱掘形を3個検出。D・E地区、遺構検出面清掃後写真撮影。ひき続き実測準備。

5・19 C地区、トレンチを北へ約12m延長。しかし、延長部では後の攪乱があり小規模な井戸を検出したのみで柱穴は検出できない。D・E区実測。一部埋戻し開始。

5・20 C地区、遺構検出終了。写真撮影後、実測にとりかかる。D地区、実測終了。

5・21 雨もようのため、埋戻し作業のみ。

5・23 C地区、実測。D地区、埋戻し作業。

5・24 C地区、実測。南端部で土壇（SK4319）検出。D地区、埋戻し作業。

5・25 C地区、SK4319は約2mの深さまで掘ったが、底が出ない。D・E地区、埋戻し。

5・26 SK4319の底部を確認。底部にちかい埋土から平安時代の瓦片が出土。実測図作製。調査終了。

I 第52—2次発掘調査

6ADC—P・R地区

1969年5月8日～6月6日

5・8 R地区，土層観察のために，幅0.5mの東西トレンチを15m設定。床土下は暗褐色砂質土で黒色土器を含む。その下層の青灰色砂質土面を遺構検出面とする。

5・9 東西15m，南北4.5mのトレンチを設定。青灰色砂層面まで排土。東半部で幅約4.5mの南北溝SD6200を検出。深さ約0.5mで埋土に土器片を含む。写真撮影。

5・10 西半部を掘り下げるが，検出遺構なし。

5・12 実測。実測終了後，土層調査のために数ヶ所を掘り下げる。

5・13 土層調査。

5・14 土層図作製。R地区調査終了。

5・30 P地区の調査開始。東半部に南北溝らしき凹みあり。

5・31 東の凹みは南北溝（SD6200）となる。埋土は大きく2層にわかれる。上層は砂層，下層は粘質土であり，いずれにも少量の瓦や土器片を含む。

6・2 SD6200調査。写真撮影。

6・3 雨のため作業中止。

6・5 実測。調査終了。

6・6 埋戻し終了。

J 第58次発掘調査

6ADH—O・T地区

1969年9月22日～10月4日

9・22 東西25m，南北3mのトレンチ設定。排土開始。

9・23 雨のため作業中止。

9・24 O地区排水作業。T地区に東西24m，南北3mの東西トレンチに直交して東西3m，南北9mのトレンチを設定。排土開始。

9・25 T地区，排土作業，O地区，遺構検出につとめる。

9・26 T地区トレンチ西端で落ちこみあり。鉞滓出土。この東は，小鍛冶塚と伝えられる跡か。O地区，遺構検出につとめる。

9・27 T地区，小鍛冶塚跡調査。遺構なし。出

土遺物なし。写真撮影。O地区写真撮影。

9・29 T地区，小ピット検出。瓦器片出土。

9・30 O地区，西北に小トレンチを設定して発掘したが，検出遺構なし。T地区，小穴数個検出。

10・1 O地区埋戻し開始。

10・2 O地区埋戻し。T地区，南北トレンチで柱根の残る柱掘形4個検出。写真撮影。

10・3 O地区埋戻し終了。T地区，実測。埋戻し開始。

10・4 T地区の柱掘形から瓦器片出土。埋戻し終了。

K 第62次発掘調査

6ABN—X地区

1970年1月7日～1月21日

1・7 調査開始。排土作業。

1・8 排土作業続行。

1・9 遺構検出開始。床土の下層は厚さ約30cmの暗褐色粘質土であるが，これには椀瓦や陶器片が含まれる。暗褐色粘質土を排土し，地山面で遺構検出を行う。

1・10 中央部で土壙を検出。近世の遺物が多数

出土。

1・12 検出面は攪乱が著しく，近年の土壙や小穴が多い。

1・13 状況は前日と変わらず。写真撮影。

1・14 実測準備。

1・16 実測。埋戻し開始。

1・17～21 埋戻し作業。

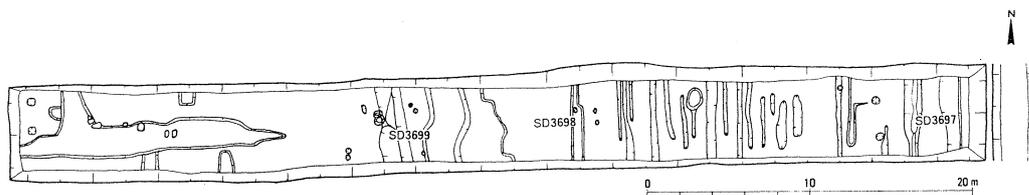


Fig. 8 第25—2次調査地実測図